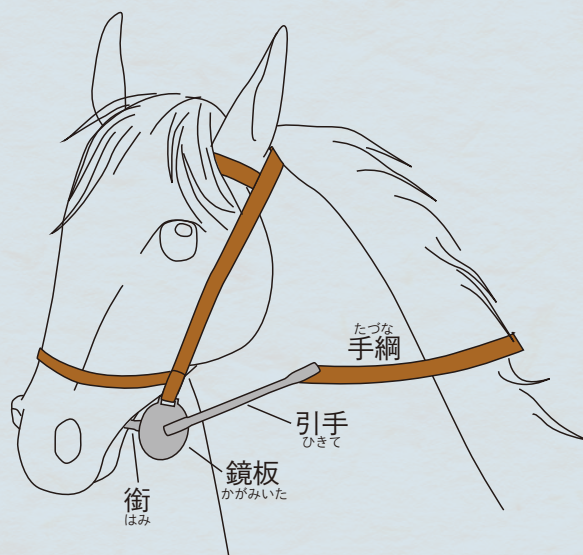


忍冬唐草文心葉形鏡板付轡

轡とは…

轡とは、手綱^{たづな}などをつけて馬^{あやつ}を操るために用いる道具で、口にかませる「銜^{はみ}」と、その両脇に取り付けた「鏡板^{かがみいた}」、そして手綱をつける「引手^{ひきて}」からなります。



轡の装着状況と各部の名称

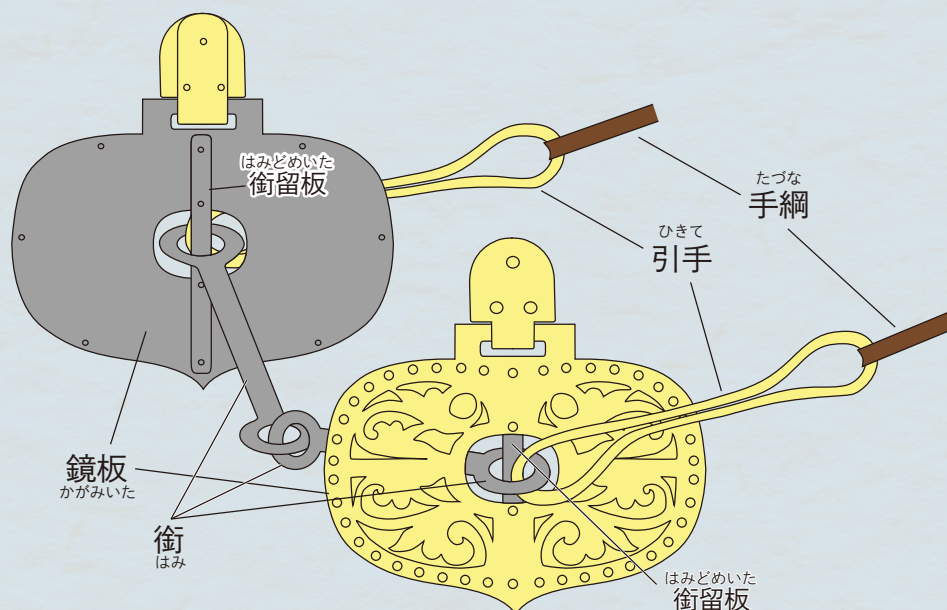
船原古墳の忍冬唐草文心葉形鏡板付轡の基本情報

銜、鏡板は下の図のように銜留板^{はみどめいた}（鏡板の裏面に取り付ける縦長の細い板）により連結されます。

銜は両端^{りょうはし}を輪にした鉄の棒2本を連結したもので、その端は鏡板の中心にあけた孔^{あな}に入れ、銜留板を通して固定しています。

引手は、細い金銅^{こんどう}の棒を二重にして両端^{りょうじょう}を輪状にした「二条線引手^{にじょうせん ひきて}」と呼ばれる形をしています。これを鏡板の表側に出る銜の端に連結し、もう一方に手綱^{たづな}を結び付けます。

金銅で作られた引手は、おそらく人の目を引くようにデザインされたのでしょう。一般的に使われる鉄ではなく、実用性に劣る金銅を用いたものは国内でも少なく大変貴重です。



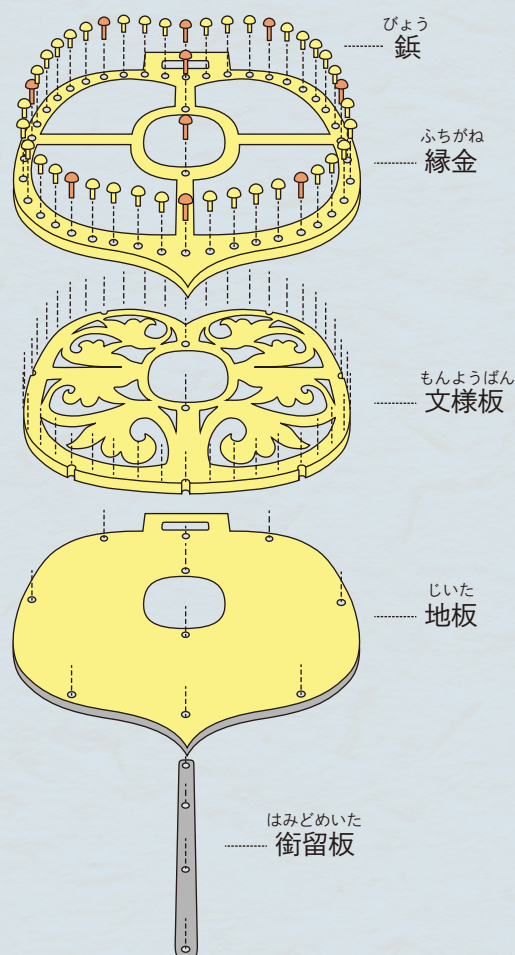
銜と引手の連結方法の図解

鏡板は、地板の上に文様板、その上に縁金を重ね、地板の裏の銜留板も含めて鉚で留めています。鉚には長くて全体を固定するもの（右のオレンジ色の鉚）と、途中までしか通っていない飾り用があります。

文様板にはスイカズラが図案化された唐草文が立体的に表現されています。ちなみに、名称の「忍冬」はスイカズラのことです。唐草文には葉脈と見られる表現がわずか0.5～0.7mmの間隔で線彫りされており、国内で発見された他のものと比べても繊細な技で作られていることがわかります。



鏡板の写真（左）と唐草文の拡大写真（右）



鏡板の構造の図解

東アジアにおける最高峰の技術によって作成された轡

船原古墳1号土坑からは轡が少なくとも6点発見されています。他の5点が土坑の南側で発見されたのに対し、忍冬唐草文心葉形鏡板付轡は北側で見つかっています。近くからはガラス製辻金具が出土しており、これらを組み合わせて用いたと考えられます。

精緻な文様の鏡板、金銅製の引手などから、この轡は当時の東アジアにおける最高峰の技術により作成されたものといえるでしょう。

- ▶ 忍冬唐草文心葉形鏡板付轡の出土時の写真
（矢印で示した細い棒が轡の引手です。銜や鏡板などはまだ見られず、土の中に埋まっているのでしょ）

